

『宗教学年報』第33輯
2018年3月31日発行（大正大学宗教学会）

論文

対外謀略と経済調査に関わった仏教者
—近代日タイ関係と佐藤政孝—

大澤 広嗣

対外謀略と経済調査に関わった仏教者 —近代日タイ関係と佐藤致孝—

大澤広嗣

はじめに

明治中期に生まれ、昭和前期に至るまで活動した、ある「仏教者」がいた。ただし、多くの仏教者のように、宗教活動のみを専念した人物ではない。対外謀略活動に携わり、現地の経済調査を行い、さらにアジアで活動する人材育成に関わった。

その人物とは、浄土真宗本願寺派（当時、真宗本願寺派）の僧侶であった佐藤致孝（さとう・ちこう、1891-1945）である。佐藤は、青年期に釈尊への憧憬を抱いたことから仏骨発見を発願して、まずタイ語を習得して、アジアへの雄飛を目指した。現地事情に精通していたことから、やがて、その知識に着目した軍部からの働きかけで、対外謀略に従事したのである。

佐藤が、タイ語の学習を開始した当初、すでに日本とタイの間で国交が結ばれて、タイに関する情報は、ある程度は国内に流布していた。日本とタイに共通するものは何か。それは、「仏教」である。ただし、妻帯する日本の大乘仏教と戒律があるタイの上座仏教は、類似するが同一ではない。とはいえ、この「仏教」を通じて、日タイの間で交流が行われてきたのである。

明治から現在に至るまで、タイに関わった日本人仏教者が多数存在するが、その中で、佐藤は注目すべき人物である。なぜなら、タイと関わった日本人仏教者の動向を見る際に、明治・大正期と昭和戦前期の間をつなぐ興味深い存在であるからだ。まさにこの時代は、帝国主義とアジア主義が興隆した時代であった。

日本人仏教者によるタイへの関与を見ると、明治期と大正期は主に宗教的な動機で、その後の昭和戦前期は主に国策協力を動機としたのであった。佐藤は、この双方に関係する仏教者なのである。つまり、佐藤を見ることで、近代における日本とタイの仏教交流について、関与の動機変容が見えてくるのである。

1 日本人仏教者の動き

本項では、導入としてタイに関わった日本人仏教者の全体像を見てみよう。明治・大正期及び昭和戦前期に区分して、渡航の傾向を掴んでみたい。ただし、紙幅

の関係で、主な人物を列記するに留め、昭和戦後期の以降は本論では扱わない [上坂 1936][ナワポーン 2013][林 2016]。

1.1 明治・大正期

明治・大正期における渡航した仏教者の特徴として、宗教的な動機に基づく関与である。まず、1887（明治 20）年 9 月に、日本とタイ（当時、シヤム）の間で、「修好条約ニ関スル日本国暹羅〔シヤム〕国間ノ宣言」が調印され、外交関係が始まり、仏教者の往来も始まった。

代表的な動きとしては、1900（明治 33）年の仏骨奉迎である。日タイ友好のためタイの王室から釈尊の仏舍利が贈られたが、この聖遺物の受贈のため、日本から赴いたのが、正使に東本願寺法主・真宗大谷派管長の大谷光演（1875-1943）で、副使に曹洞宗の日置黙仙（1847-1920）、真宗本願寺派の藤島了穩（1852-1918）、臨済宗妙心寺派の前田誠節、随行員には 14 人が渡航した。この仏骨を安置すべく、1904（明治 37）年に名古屋において建立されたのが超宗派による覚王山日泰寺（当時、日暹寺）である。

この時期に、タイに赴いた僧侶は、上座仏教の聖典の言語であるパーリ語の修得を目指していた。学問的な目的に見えるが、究極的には、釈尊の真意を探るための宗教的な動機である。

また、次の人物がいる。臨済宗円覚寺派の釈宗演（1859-1919）は、慶應義塾別科に入り福沢諭吉の勧めで、スリランカ（当時、セイロン）に留学するが、その帰途の 1889（明治 22）年にタイへ立ち寄っている。真宗大谷派の織田得能（旧姓・生田、1860-1911）は、日本で初めての仏教の辞書である『仏教大辞典』を執筆するも志半ばで死去した人物だが、1888 年からの 3 年間でタイに留学をしている。真宗仏光寺派の善連法彦（よしつら・ほうげん、1865-1893）は、1888 年にタイとスリランカに渡っている。浄土宗の概旭乗（おおむね・きょくじょう、1873-1937）は、1889 年にタイへ渡り 1905 年に帰国したが、同年に再び渡航してタイに帰化した。

臨済宗の上村観光（1873-1926）、黄檗宗の溪道元（1877-1966）、曹洞宗の遠藤竜眠も、渡航した僧侶である。真言宗の釈興然（1849-1924）は、スリランカに渡り、1890（明治 23）年に日本人で初めての上座仏教の僧侶（比丘）となり、帰国後は、住職を務めていた横浜の三会寺を拠点に釈尊正風会の活動を進め、上座仏教圏との

交流を行う。1907（明治40）年にタイへ渡り、諸寺院から金銅の釈迦牟尼尊像が多数贈られ、帰国後に三会寺周辺の32か寺に分配して札所巡りを始めたという。

なお、1911（明治44）年には、前述の日置黙仙が、ラーマ6世の戴冠式に参列している。

1.2 昭和戦前期

昭和戦前期における特徴として、国策協力を動機とする関与である。1937（昭和12）年に、全日本仏教青年会連盟（理事長、大谷瑩潤）は、日タイの仏教親善のため訪暹仏教団を派遣した。真宗大谷派の浅野研真（1898-1939）、天台宗の関根晃融、曹洞宗の木全大孝と小松原国乗、真宗本願寺派の武田智了などが現地に向かった。

1939（昭和14）年9月、バンコクにて、日泰文化研究所（発足時は日暹文化研究所）と盤谷〔バンコク〕日本語学校が設置された。外務省の補助金を用いて設置したものだが、在バンコクの日本公使館（1941年8月大使館昇格）の直属団体ではなく、副領事の監督下にあった。前任の責任者が解任されたため、1940年10月には後任の所長として仏教学者で真宗本願寺派の平等通昭（後に通照、1903-1993）が着任して、タイでの日本文化の宣伝活動に従事したのである。

1941（昭和16）年には、興亜仏教協会（同年に財団法人大日本仏教会へ再編）が、真宗大谷派の藤波大圓（1893-1945）と新義真言宗智山派の山本快龍（1893-1948）をタイに派遣して、政府と仏教界の要人と接見させた。同年の対米英戦の開戦直前には、高野山大学教授で古義真言宗の上田天瑞（1899-1974）が、戒律研究のためバンコクに留学した。しかし、現地で戦争が始まり、タイ領内を通過した日本陸軍に徴用され、ビルマ進攻作戦にて宣撫工作に関わった。

1943（昭和18）年7月には、木辺孝慈（1881-1969）が使節として派遣され、バンコクのワット・プラケオにて仏骨の寄贈を受けた。木辺は、財団法人大日本仏教会の前会長で、真宗木辺派管長であった。随行をしたのは大日本仏教会興亜局長で真言宗の中村教信（1893-1961）、興亜局連絡部長で曹洞宗の森大器、侍者は真宗木辺派の仲井義照であった。興亜局では、タイに対して様々な事業を展開したが、その一環として、真宗大谷派の佐々木教悟（1915-2005）を留学生としてタイに派遣した。

大東亜省の外郭団体である財団法人日泰文化会館では、現地に会館の新設を計画するが、その際に五重塔を模した仏教館が含まれることになった。1943（昭和18）

年に臨済宗僧侶の武藤叟（僧名は仁叟、1898-1974）が主任として着任し、前述の森大器は1944（昭和19）年から会館の仏教部長となった。

なお、昭和戦前期の主たる特徴は国策目的であるが、宗教的な動機による渡航僧も、若干は存在する。例えば、古義真言宗の藤井真水（1907-1991）は、1932（昭和7）年にタイへ渡り、1935年にタイ国日本人会によりバンコクにて日本人納骨堂が建立されると初代の管理僧となった。古義真言宗の吉岡智教は、1936年から1940年までタイで比丘生活を送った。

本論で述べる佐藤致孝は、明治・大正期から昭和戦前期まで、タイに関わった人物である。つまり、明治末期に海外渡航を志して、大正期にはタイに渡航して、昭和戦前期には日本のタイ重点化の国策により、現地を知る佐藤の知識が重用されたのである。

2 佐藤致孝の略歴

2.1 生い立ち

佐藤致孝は、新潟県西頸城郡西早川村（現、糸魚川市新町）にある真宗大谷派大蓮寺の二男として、1891（明治24）年2月6日に生まれた。

11歳のときに請われて、東京市芝区三田台町1丁目27番地（現、東京都港区三田4丁目11番30号）にある浄土真宗本願寺派の常教寺の養子となった。

常教寺は、山号を「光闍山」（こうせんざん）といい、天正17（1589）年に、武蔵国大森の沢田郷にて開基した。その後は、三田にある松平阿波守の中屋敷の附近に移り、1895（明治28）年には、元々は墓地であった現在地に本堂を移転した。

佐藤の叔父である大蓮寺出身の佐藤賢精が、東京に出てビスケットなどを売る洋菓子屋を営んでいた。賢精は、機縁により大谷派から本願寺派に転派して、1895（明治28）年に常教寺へ入寺した。一時は教勢が衰えていた同寺だが、賢精が第13世住職となり再興されたのであった。賢精には、実子がいなかった。そこで後継者と



図1 常教寺本堂。1958（昭和33）年にインド風の様式で再建

して指名されたのが、後に第14世住職となる甥の致孝である。

2.2 タイ語を学ぶ

明治末期に佐藤致孝は、浄土真宗本願寺派を母体とする京都の仏教大学（現、龍谷大学）に入る。勉学を深めるなかで、仏教の教主である釈尊が生まれたインドへの憧憬を募らせていった。

釈尊の没後に、弟子たちによって遺骨は八つに分骨されて、その場所は後世に判然としなくなった。うち一つは、1898年にインド北部のヒマラヤに近いピプラーワールの森林から、イギリスの駐在官であったペップ（William Claxton Peppe）によって、金の壺に入った釈尊の聖遺骨とされるものが発見されたのである。佐藤は、残りの仏骨を探し出そうとした。そこでタイ経由でインドに入域することを志して、2年で中退したのである。

佐藤は、1913（大正2）年に東京外国語学校（現、東京外国語大学）の暹羅語科（修業年限3年）に入学した。当時の同校は、東京市神田区錦町3丁目14番地（現、千代田区一ツ橋2丁目1番2号）に所在していた¹。

暹羅語科は、その2年前の1911（明治44）年に新設され、当初は隔年で学生募集を行うことになっていた。暹羅語部の担当教員は、引用した資料の原文どおりに人名を記載すると、「ナイ・ピン」（1911-1912年在任）、「ナイ・プー」（1912年在任）、「ブンヤット」（1913-1915年在任）であった。暹羅語科の新設と同じくして、東洋語速成科馬來馬來〔マライ〕語学科（修業年限1年）が馬來語学科（修業年限3年）に昇格している²。暹羅語科における初期の卒業生は、次のとおりである。

第1回生卒業生、1914（大正3）年3月卒、池田林儀（秋田）、大河薫（京都）、服部繁松（静岡）、堀亮一（和歌山）

第2回生卒業生、1916（大正5）年4月卒、石神正宝（東京）、小倉直（鹿児島）、佐藤致孝（東京）、鈴木清光（埼玉）〔東京外国語学校1918：142〕

卒業生のうち、池田林儀（1892-1966）は、講談社、報知新聞社、京城日報社などに勤務したジャーナリストとなる。小倉直（1893-1968）は三菱合資会社香港支店を経て、日南産業を創業して南方との貿易を進め、戦時中は語学力を評価され日本陸軍第39軍（泰国駐屯軍）司令官の陸軍中将中村明人の要望によりタイ各地で

活動した。

佐藤は、第2回卒業生の4人の中で、一番目の成績で卒業した。第1、2回の学生達の就職先は、官庁1人、会社4人、自営業2人、その他1人であった。彼らが在籍した時期は、タイ語を習得しても、それを活用できる職種がなく、入学者も少なかった。そのため、1915(大正4)年から本科の学生募集を中断して、同校での教育は後述する1940(昭和15)年の学科復活まで、待たねばならなかった。

当時は、明確な目的がない海外渡航の旅券発給は、容易には許可されなかった時代であった。そこで佐藤は、横浜郵便局外国郵便課に通信書記として勤務しつつ、海外雄飛の機会を待ったのである。

2.3 堀越商会の盤谷出張所

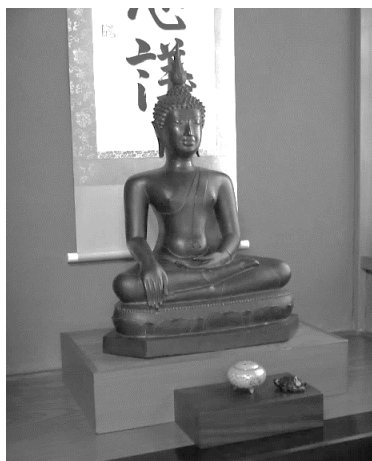


図2 佐藤致孝がタイから将来した釈迦如来坐像(常教寺所蔵)

佐藤致孝に、渡航の機会が訪れた。堀越善重郎(1863-1936)が設立した、堀越商会の盤谷出張所での責任者となり、1920(大正9)年に、バンコクへ赴任することになった。同商会は、1893(明治26)年に創業され、翌年にはニューヨークに支店を設置して、絹織物や雑貨などの輸出に携わった総合貿易商社であった。業務拡大のため、1918(大正7)年にタイの盤谷出張所、ジャワのスラバヤ出張所を設けたのである。なお、佐藤の同期生である鈴木清光は、1919年当時に、三井物産のバンコク出張所に勤務していた。

赴任した佐藤は、バンコク市内にあるワット・サケットのタンマ・チェリヤー大僧正の知遇を得る。ワット・サケットは、丘の上に黄金の仏塔がそびえる寺院である。佐藤は、父の月命日である毎月20日には、タンマ・チェリヤーに読経を依頼していたが、同寺にある仏舎利が納められた塔の内部にある仏壇で法要が行われた。佐藤は、1921(大正10)年8月から11月にかけて、チャオプラヤー川に沿って約400キロメートルを北上して、タイ北部のチェンマイに至った。この近辺は、チーク材の生産地であり、日本向けに輸出する木材の買い付けを兼ねて、所在が分からない分骨された仏舎利を見つける探検でも

あった。この頃、タンマ・チェリヤーの仲介で、ラーマ 6 世（1881-1925）にも謁見して、王室寺院のワット・プラケオを参詣したこともあった。

しかし、堀越商店の現地事業は、成功には至らず、佐藤は 3 年間の滞在を経て、1923（大正 12）年 4 月に帰国した。

この滞在期間中において、佐藤はタイ仏教への理解を深め、現地では僧侶と接点を持った。彼らに対する印象は、後に「僧侶は一律に剃髪して、上は大教主たる法親王より、下は雛僧に至るまで粗布の黄衣を纏ひ、何等上下の区別がない。平等を説く仏教僧として如何にも尊く感ぜられる」〔佐藤 1942b : 22〕と述べている。

2.4 帰国後の活動

日本に戻った佐藤致孝は、様々な活動に従事する。その一つが、日本海軍の将校との人脉構築であった。第一次世界大戦での戦勝の結果、旧ドイツ領であった南洋群島は、国際連合からの委任統治領として日本が領有した。こうした南洋への領土拡張から、海軍の南進論者に接近したのではなかろうか。神奈川県横須賀の軍港を訪ねて、海軍将校の八代六郎（1860-1930）とは、しばしば意見交換を行った。ある時、八代の紹介で、伊達順之助（1892-1948）と出会う。伊達は、満洲で活動した大陸浪人で、軍閥を率いた張作霖（1875-1928）のもとで軍事顧問を務めた。関東大震災の際に、社会運動家の大杉栄（1885-1923）を殺害した罪で服役していた陸軍憲兵大尉の甘粕正彦（1891-1945）の身柄の引き取りで、帰国していた時に佐藤は出会い、その後も、年に何度か帰国する伊達と会談した。また、国家主義者の北一輝（1883-1937）や大川周明（1886-1957）とも、佐藤との接触があったことが伝わっている〔読売新聞新潟・松本支局 1969 : 273〕。

佐藤は、昭和の初期には、社団法人生命保険会社協会（現、一般社団法人生命保険協会）に勤務していた。協会は、東京市麹町区丸ノ内 3 丁目 4 番地（現、千代田区丸の内 3 丁目 4 番 2 号）にて日本石油が所有したオフィスビルの有楽館に入居した。協会が発行する季刊誌『生命保険協会会報』の奥付を見ると、1930（昭和 5）年頃から 1935 年まで、印刷人の名義として佐藤の氏名が記載されている。佐藤が就職した経緯は、詳らかではないが、仏教者として宗教活動に専念するよりは、再び海外活動の機会を得るため、丸の内に本社を置く大企業の幹部と知り合う機会が多い、この協会に身を置いたのだろうか。

佐藤は、海軍関係者との交友から、海軍元帥の東郷平八郎（1847-1934）の直筆

による揮毫を譲り受けていた。海軍協会名古屋支部長である松坂屋社長の伊藤次郎左衛門（1878-1940）の呼びかけで、「大東郷展覧会」が開催された際に、これを出品した。1932（昭和7）年5月15日付で、佐藤宛に礼状が送られている。ただし揮毫は、東京大空襲で焼失して現存しない。

佐藤は、タイ語のほか、外国語の能力に優れ、英語、フランス語、ヒンディー語、マレー語ができたため、戦時中は軍の命令で、謀略放送の原稿作成や情報収集に従事していたという。佐藤は、東京外国語学校でタイ語の教鞭を執るがこの点は後述する。

2.5 家庭の様子

佐藤致孝は、生涯にわたり未婚であった。対外活動に専念するためであったろうか。兄の子である甥の佐藤攝善を、新潟から迎えて、常教寺の後継者とした。佐藤は、住職を務める三田の常教寺を拠点とせず、東京市大森区北千束町708番地（現、大田区北千束1丁目15番4号付近）に別宅を構えたという。

それには、理由があった。タイから来た複数名の留学生を別宅に住ませ、近隣にある官立の東京工業大学に通わせたからである。彼らに、生活費や学費などを支援していたが、決して寺の経費には、手を付けなかった。ただし、資金提供先は不明である。

戦争の激化により、一時は郷里の新潟に疎開をしたが、再び上京した。敗戦前の1945（昭和20）年4月15日に、疲労がたたって、肺炎により佐藤は死去した。日本とタイとの間を生きた54歳の生涯であった。常教寺は、同年3月の東京大空襲により本堂は焼失して、佐藤の遺品の多くも、この時に焼けてしまった。郷里の大蓮寺は、実弟である佐藤扶桑が住職を継承した。

なお、前述のタイ人留学生の一人に、トウイン・タンタポンという人物がいる。タンタポンは、高い工業技術を身に付けて、終戦直後の1947（昭和22）年にタイへ戻り、母国の工業化に尽力した。佐藤は、甥の攝善と下宿するタンタポンを分け隔てなく接して、大事に育てた。両者とも、1922（大正11）年生まれで仲睦まじく、トウインは攝善を「兄」と呼んで帰国後も慕ったという。佐藤の没後に、攝善が常教寺の第15世住職となり、代を重ねて現在に至っている。

3 語学教育の従事

3.1 東京外国語学校の学科復活

昭和前期のタイ語教育は、時局とは無縁ではなかった。日中戦争以降、タイとの連携が次第に強化されていったからである。1937（昭和12）年4月、東京外国語学校において、暹羅語速成科が設置された。これは、修業年限1年にて、夜間に毎日2時間の講習を行う特設の課程で、佐藤は教務嘱託として教えた。設置直前の『朝日新聞』の報道によれば、次のとおりである。

昨秋行はれた本社〔朝日新聞社〕の日暹飛行を初め各方面の親善によつて最近シヤムとの友好関係は頓に緊密を加へて来たが、これを機会に東京外語では新にこの四月の新学年よりシヤム語科を新設することになつた、講師は同校卒業生でかつてシヤムに在留した佐藤致孝氏及びシヤム国人レック・レメルチ氏〔東京朝日新聞 1937：13〕。

暹羅語速成科に加えて、1940（昭和15）年から暹羅語部の学生募集が再開され、佐藤は1941年から本科で教えた。シヤムからタイに国号が変更になったことに合わせて、1941年に、暹羅語部は泰語部に改称された。この頃の体制は、主任教授にはタイ国公使館学生副監督官であった山口武が就任して、講師は佐藤致孝、ブラコープ・ブッカマンであった。佐藤は、1945年までその任にあり、非常勤の待遇であった。東京外国語学校の泰語部の復活について、佐藤は次のように述べる。

顧れば泰語本科復活設置運動は開始以来四年越しであつたが、これが最初の口火を切られたのは中村嘉寿氏であつた、氏の斡旋が今回実現の原動力となつたことを茲に特記し、日泰親善の爲めに慶祝の意を表し、且つ大東亜共栄圏樹立の爲めに其一翼のなつた事を祝福するものである〔佐藤 1941a：22〕。

文中にある中村嘉寿（1880-1965）とは、雑誌『海外之日本』を創刊した人物である。東洋文化学会代表、海外貿易振興会代表、法政大学教授などを



図3 1943（昭和18）年頃に撮影された佐藤致孝の肖像（常教寺提供）

歴任して、1924（大正13）年から衆議院議員を務め、以前から日本人の海外活動に強く関心を寄せてきた。タイから日本への留学生の増加、両国間での貿易額の増加などにより、タイ語の必要性が増大してきたため、東京外国語学校においてタイ語の学科復活を求めていたのである。

泰語部の第一期生である春日慶司は、佐藤について「学究肌の物静かな先生で、特に強い印象はなかったが、タイ語の特徴である声調については丁寧に教えて頂いたことを良く覚えている」[田中 2002 : 7] と述べている。佐藤は、授業でタイの小学校教科書を教材に使っていたという。1944（昭和19）年には、復活1期生の18人が卒業したが、同年には校名を東京外事専門学校と改称している。

佐藤は、1940年頃から財団法人日本タイ協会（現、公益財団法人）に勤務していた。同協会の主催により1942（昭和17）年から1943年まで、日泰学生錬成会が開催されて、日本とタイの学生の交流が行われ、東京外国語学校の生徒も参加した。

3.2 巴利文化学院における教育

佐藤致孝は、巴利文化学院（後に萩山道場と改称）にて、タイ語の主任講師として教えていた。この学院は、南方進出を行う青年仏教者を錬成した教育機関である。当初は、哲学者の井上哲次郎（1856-1944）が院長を務めて、学術団体である国際仏教協会が経営していた。後に学院は1943（昭和18）年に財団法人仏教圏協会へ移管された [大澤 2015]。

学院における佐藤の関わりを見てみよう。1941（昭和16）年4月8日に、開院式と第1期入学式が行われた。学院は、東京市麻布区北新門前町10番地（現、港区東麻布2丁目35番2号付近）の国際仏教協会内に、仮校舎と法堂が置かれた。開院式では、法堂の宝壇に、金銅仏像が安置されたが、佐藤がタイ滞在時にチェンマイから招請したものである。

同年4月11日より、第1期の講座が開始された。講座は月曜日から土曜日まで行われ、佐藤によるタイ語の授業は、月曜日の13時から15時まで、金曜日の10時から12時までの週2回であった。6月20日に、南方仏教青年会が結成され、学院内に事務局が置かれたが、これは同学院生、仏教系大学、東京外国語学校などの学生で組織されたものである。7月21日には、東京市小石川区金富町18番地（現、文京区春日2丁目16番12号）にあった曹洞宗金剛院内に、学院が移転した。10月3日に、第1期授業が終わり、その後には修了生は、陸軍軍属として開戦直後のピ

ルマ進攻作戦に加わり、僧侶の立場から宗教宣撫工作を行い、ビルマ民衆に日本の理念を宣伝したという。

仏教圏協会理事長として学院の運営に関わった山名義鶴（1891-1967）は、佐藤の著作に次の序文を寄せている。

佐藤君は一見温厚な、学究的な印象の好紳士であるが、その肚裏には救世済民の情熱をたぎらせて居られる国士だと自分は尊敬して居る。恐らくタイの国と人とを起ちあがらせたい悲願は、佐藤君の夢寐にも忘れざるところであらう。そして仏教への深き信仰はまた、佐藤君の悲願の湧き出づる深淵でなければならぬ。……実に著者のタイ国に於ける十数年の生活の間に、国士的識見と熱烈なる信仰を以て体験されたところの、血のかよつたタイ国の仏教の記述である [山名 1942 : 2]。

この一文から、佐藤は、日本とタイに身を挺すことを使命とした仏教者であったことが、伺い知ることができよう。そのため、一介の学僧としてだけではなく、修得したタイ語の教育を通じて、アジアに活動する青年の育成に貢献しようとしたのである。

なお、巴利文化学院の母体である財団法人仏教圏協会の幹部であった佐々木喆山（1900-1990）が、1943（昭和 18）年 3 月に、バンコクを訪問した際に、ワット・サケットの住職であるタンマ・チェリヤー大僧正から仏舍利を贈呈される。大僧正の主治医が現地在住の医師横田恭一であったことから実現したものだが、大僧正と佐藤致孝が旧知の間柄であったことで円滑に進んだものである。

4 調査研究の実施

4.1 南洋経済研究所

佐藤致孝は、財団法人南洋経済研究所において調査研究の事業に関わっている。判明しているだけで、4 冊の報告書の執筆を手掛けている。同所では、計 500 点以上の資料集を作成しているが、その第 1 号と第 2 号が、佐藤の執筆であることは、注目すべき点である³。それは、同所の活動の中心を担った、海軍大佐の小西干比古（海軍兵学校第 41 期）との人脈があったからであり、また同所がタイを重視していたことの表れである。

南洋経済研究所の沿革は、次のとおりである。1937（昭和12）年11月1日、海軍省の斡旋と指導により設立され、理事長に海軍少将の糟谷宗一（かすや・そういち、1885-1942）が就任した。1941年7月には、財務基盤の強化のため、財団法人の設立許可を受けた。国策企業である東洋拓殖株式会社の関連会社であった南洋興発株式会社からの寄附金などを基に設立されたものである。1942年1月に、糟谷が没したため、常務理事の小西が経営の中心となる。本部は赤坂区表町4丁目1番地（現、港区赤坂8丁目1番19号）、出版部は麹町区内幸町2丁目3番地（現、千代田区内幸町1丁目3番1号）の幸ビル内に所在した。

同所の目的は「南洋資源ノ利用ノ即時実行可能ナル科学的研究ヲ行ヒ、以テ我が国策ニ寄与スル」で、調査研究機構は、「研究所ヲ蘭印〔オランダ領東インド〕、比律賓〔フィリピン〕、馬來、仏印〔フランス領インドシナ〕及ビ泰ノ五班ニ分チ……必要ノ調査研究ヲナス」〔富樫 1941：400-401〕のであった。事業は、「一、南洋資源利用の科学的研究／二、南洋事情の調査研究／三、調査研究に基く参考資料の刊行／四、その他理事会に於て必要と認めたる事項」〔大東亜省 1944：224〕である。

幹部については、1944（昭和19）年当時で、代表理事は小西干比古（こにし・たてひこ）、理事は中堂観恵、柴勝男、棚木范、大波信夫、監事は鶴沢聡衛、評議員は平出英夫、矢牧章、棚木范、大波信夫、主事は菊地淳であった。

理事の中堂観恵（1894～1985）は、佐藤と同じく、真宗大谷派の寺院出身者である。中堂は、石川県鳳至郡穴水村（現、鳳珠郡穴水町）の誓運寺にて、住職の中堂深仲の長男として生まれた。海軍兵学校（第44期）を卒業後、艦隊勤務など様々な軍歴を経て、1935（昭和10）年10月軍令部出仕（シヤム駐在）、1936年6月シヤム国公使館付武官となり、1938年6月に帰国した。その後、フランス領インドシナ、ビルマに駐在して、軍の南方作戦に重要な役割を果たした。

さて、佐藤が、南洋経済研究所で担当した報告書は次の4冊である。「南経研資料」（後に「南洋資料」）なる通巻番号が付されていない（3）については、大谷光瑞と関わりがあったが、この点は後述する

- （1）『友邦暹羅事情を語る』（南経研資料第1号、南洋経済研究所、1937年4月）、A5判、全30頁。構成、一 暹羅へ行くには／二 上陸一步の印象／三人情風情／四 交通機関／五 美しい住宅街に行く／六 旺盛なるスポーツ熱／七 徹底せる国粹振り／八 在留日本人の現況／九 英主「チュラロンコル

ン」陛下の治蹟／一〇 暹仏事件顛末／一一 未発表の英暹条約／一二 内外政の一大改革／一三 英風追慕の暹羅人／一四 自主外交の確立／一五 軍部の革命と国会開設／一六 新帝擁立と治政／一七 大戦後に於ける国権恢復運動／一八 軍備／一九 教育／二〇 国際連盟に於ける「棄権」の意義／二一 満洲国承認問題／二二 日暹貿易問題／二三 日本、今後の対策／附図 暹羅国地図 [佐藤 1937a]。

(2)『暹羅の産業に就て』(南経研資料第2号、南洋経済研究所、1937年10月)、A5判、全78頁。構成、一 位置及面積／二 人口／三 気候／四 資源／五 可耕地／六 米作／七 甘蔗／八 棉／九 煙草／一〇 玉蜀黍／一一 豆類／一二 胡麻／一三 胡椒／一四 椰子／一五 護謨／一六 檳榔樹／一七 其他の農産物／一八 精米業／一九 畜産業／二〇 林業／二一 水産／二二 鑛業／二三 工業／二四 労働／二五 交通／二六 在暹日本人／二七 投資上より見たる条件／二八 農民の移住／附図 暹羅国地産業地図 [佐藤 1937b]。

(3)『暹羅産ステイック・ラックの台湾移殖に就て』(南洋経済研究所、1938年8月)、A5判、全6頁 [佐藤 1938b]。

(4)『泰国の産業に就て』(南洋資料第96号、南洋経済研究所出版部、1942年12月)、A5判、全81頁。(2)の改訂版。構成は「一七 其他の農産物」を「一七 其の他の農産物」、「二六 在暹日本人」を「二六 在泰日本人」と変更して、各種の調査結果の数字を更新した内容 [佐藤 1942c]。

4.2 南洋懇話会

佐藤致孝の発案により、南洋懇話会が組織された。これは、東京に所在する各大学と専門学校にて、海外植民や南洋に関する講座を持っている教員で組織された研究会で、南洋経済研究所内に事務局が置かれた。

1938(昭和13)年6月9日に、東京の日比谷公園内にある西洋料理店の松本楼にて、第1回会合が行われ、約30人が参加した。懇話会の世話人である、立教大学教授で日本大学専門部拓殖科講師の今村忠助(1899-1954)は、次のように冒頭で挨拶を述べている。

この南洋懇話会と云ふのは、只今申上げました外語の佐藤先生が熱心に御尽力なさいました結果、南洋経済研究所と積極的に連絡をつけられまして、茲に発会するに至つたものであります。私は南洋を旅行したことがあると云ふ事と、大学で海外に関する講座を担当して居るところから、佐藤先生から御相談を受けた次第であります。大体月に一度、と申しましても、大学の忙しい時、休みの時とを除いて、年に七、八回、そう無理でない程度に、南洋に関する会合を開き、お茶を飲み食事をし乍ら、肩の凝らない程度に研究して行つたらどうかと云ふことが、南洋懇話会設立の目的でございます。

……大体此处で南洋と申しますのは我国の海軍で決めて居られる内外の南洋〔内南洋、外南洋〕の事で、日本と現在緊密の関係をもつ比律賓、爪哇〔ジャワ〕、スマトラ、ボルネオ、ニューギニア等を含めるばかりでなく、大陸に足を入れ、馬來半島、仏領印度支那〔インドシナ〕及び暹羅をも入れて居るのであります〔今村 1938 : 2-3〕。

なお、今村が教えた日本大学専門部拓殖科は、1937（昭和 12）年に開講したが、日本大学法文学部学監の小松雄道（1892-1979）が、学科運営の中心を担い、後には学科長となっている。小松は、かつて北米開教師を務めた浄土真宗本願寺派の僧侶であった。

今村の挨拶の後、理事長の糟谷宗一による挨拶があり、ここでも佐藤のことを紹介している。南洋懇話会を開催することで、任意団体である南洋経済研究所が、監督官庁からの財団法人の新規設立許可に向けて、活動の実績を作るために開かれたことが伺える。

只今、今村先生からお話がありました通り、会の起りは外語の佐藤先生が、私のほうの所員が御厄介〔東京外国語学校でタイ語を履修〕になつて居る関係上、昨年〔1937〕の 11 月頃からお出でになりまして、各学校で種々南洋のことを研究して居る、それを横に集めて自分の研究した事をお互にお話し合ふと云ふ様な機関があると非常にいゝのだがと云ふお話がありました。丁度私共研究所の申請中でありまする財団法人の寄附行為の中の事業の部にさう云ふことが載つて居り、……御同好の方がお集まりなさつて……南洋に関する知識を啓発と云ふのが目的であります〔糟谷 1938 : 5〕。

挨拶の後に、南洋経済研究所嘱託の三吉朋十（みよし・ともかず、1882-1982）による講演「比律賓の高山蕃を語る」が行われた⁴。初回の会合の終了後、講演の模様などを収めて、佐藤の編集により、小冊子の『南洋懇話会速記録』（佐藤 1938a）が作成された。その後、懇話会の継続開催は確認できない。

5 大谷光瑞の存在

南洋経済研究所の刊行物には、大谷光瑞（1876-1948）が執筆したものがある〔大谷 1942・1944a・1944b〕。大谷は、中央アジアに大谷探検隊を派遣した人物であったが、1925（大正 14）年に西本願寺法主と真宗本願寺派管長を辞任して、その後は宗門外で活動したアジア主義者である〔柴田 2014〕。大谷の著述は、同研究所の幹部と接点があったゆえ公刊に至った。

大谷と佐藤の間でも交流があり、大谷の助言が契機となり佐藤が執筆した資料集『暹羅産ステイツク・ラツクの台湾移殖に就て』がある〔佐藤 1938b〕。後に雑誌『南洋経済研究所研究資料』に記事として転載された〔佐藤 1939b〕。

スティック・ラックとは、天然由来の樹脂製品のもととなる木材資源を指す。詳述すると、インドボダイジュなどの枝に昆虫が寄生して、虫が自ら保護するため身の周りに分泌した樹脂層が付着した枝を指し、成分が付いた枝を伐採して、工場にて精製すると、セラックという天然由来の樹脂製品の原料となる。

同書の序文には、1938（昭和 13）年 8 月 3 日付けにて、大谷との関わりが記されているので紹介しよう。

昭和十三年七月中旬、大谷光瑞猥下、東京築地本願寺に御滞在の砌、筆者拝接、暹羅の産業に就て種々御高見を拝聴す。談会々暹羅産ステイツク・ラツクに及ぶ。猥下は「暹羅のラツクを台湾に移殖培養して見ては如何」との仰せ、成程御卓見なりと考へ折柄上京中の台湾総督府殖産局長田端幸三郎〔1886-1963〕氏を訪ひ猥下の御意見を伝へ移殖可能性につき筆者の所見を述べ。田端局長は「近日台湾へ帰任の上が早速暹羅に専門家を派遣し取調べさせて見る」と申さる。依て筆者は暹羅産ステイツク・ラツクに就き知れる限りを誌し田端局長の高覧に供したり。今茲に南洋経済研究所の好意に依り之を印刷に附し諸賢の御清誂を乞ふ次第なり〔佐藤 1938b : 1〕。

大谷は、東京に来ると築地本願寺が宿舎となったが、頻繁に佐藤を呼び出していたという。佐藤は、東南アジアの宗教事情、地理、林業に関する多くの資料を風呂敷に包んで持参して、大谷と面会した。その鞆持ちには、甥の佐藤攝善を常に同行させた。

ある日、大谷は、佐藤に向かって「攝善を南洋に出す気はないか」と尋ねたという。大谷は、神戸六甲山麓に別邸二楽荘を立て、その横に英才教育をすべく武庫仏教中学校を設けたなど、本願寺派関係者のなかから、国外で活躍する人材を養成してきたことで知られる。

しかし、佐藤は、大谷からの申し出を、寺の後継者であることを理由にして丁重に謝絶した。それは、佐藤自身が常教寺の住職であるにも関わらず、公私多忙でアジア関係の活動に関わり、攝善に寺の法務を任せていたからである。

佐藤自身は、寺院での宗教活動よりは、専門的な語学能力を生かして、日タイ連携のため、活動するという強い思いがあったのではなかろうか。

6 単著『泰国の仏教事情』

昭和10年代後半に、「大東亜共栄圏」建設のため、日本は南方地域を重点化した。そのため、出版界では、タイなど南方に関する多数の通俗的な書物が刊行された。佐藤は、これまで複数の雑誌に論説を寄稿してきたが、これらを1冊にまとめたのが、1942（昭和17）年12月に会通社から刊行された、単著の『泰国の仏教事情』である [佐藤 1942b]。

同書に再掲された論考には、国際仏教協会の機関誌『海外仏教事情』に発表した2本の論考があるが、名義は筆名「扶南堂三友」であった（扶南堂 1941a・1941b）。扶南とは、1～2世紀頃にインドシナ半島南部に、クメール人が建てた古代国家で、タイの領域と重なっていた。本書の構成は、次のとおりである。

タイ国の仏教（一 概説／二 沿革／三 教義／四 寺院／五 僧侶／六 僧侶の教育／七 寺院学校に於ける国民教育／八 寺院の管理、僧侶の監督／九 其他の宗教／一〇 仏教僧侶の立会ふ観衆）

仏教行事（一 サケー寺院の仏塔供養祭／二 仏足跡寺法会／三 摩訶マカブツ仏ブツ謝シャ／四 ナコン・パトムナムの仏塔祭／五 トウ・ナム（誓忠式）／六 ソンク

ラン／七 歡喜天供養祭／八 プラケオ寺院の開扉式／九 始耕祭／一〇
カオ・ウキサカ・プチャー／一一 カオ・パンサー、オーク・パンサー／一二
灯籠流し／一三 天長節／一四 迦稀那祭／一五 チュラロンコルン皇帝銅
像祭／一六 豊年祭)

仏教芸術 (一 建築／二 仏像／三 木材彫刻／四 絵画／五 鍍金細工
及び象嵌／六 織物及び刺繍)

パンコツク府内仏寺巡礼 (一 プラケオ寺院／二 ラーチヤ・プラデイト
寺院／三 ラーチヤ・ボピット寺院／四 ポー寺院／五 チエン寺院／六
スタス寺院／七 サケー寺院／八 ベンチャマ・ボピット寺院／九 ボロニ
ウエート寺院／十 リエブー寺院／一一 カラヤー寺院)

旧都アユチャを訪ふ (アユチャ／旧王城址／河市場／象狩場)

真如法親王の御事蹟

和蘭人の記録に拠る山田長政の事蹟

天竺徳兵衛物語に就ての考察

本書は、タイ仏教の概説書であり、巻末にはタイと関わった過去の日本人のことを紹介している。『泰国の仏教事情』の初版奥付を見ると発行部数として2000部と記され、タイに渡った軍人軍属、商社員などに読まれたのであろう。タイは仏教国であるため、本書は有用であったと思われる。同書の「自序」からは、佐藤が見た戦争をめぐるタイ仏教の位置がわかるので、長文となるが、引用したい。

大正十二年四月、タイ国より帰朝して既に二十年の星霜を閲した。二昔前のタイと今日のタイとは凡ゆる方面にて一大転換をなし、特に軍事、産業、経済方面に至りては著しい進歩発展の歩みを続けてゐる。然し乍ら仏教事情に至りては二昔前と今日とは大して変化を見てゐないと聞き及んでいる。依然、タイ国は世界仏教の中心地をなしてゐることに変りがない。

曩頃、畏友佐々木喆山氏が予に語るに「大東亜緒戦に於て、日泰攻守同盟が結ばれ、その調印式がプラケオ寺院内エメラルド仏陀尊像前で、而も仏教僧侶の読経裡に行はれたと言ふことは、吾等仏教徒の永く印象さるべきものである。日泰両国民は今後、軍事、産業、経済方面のみならず、『同じ仏陀が護ります』との信念の下に心と心が、もつと、もつと緊つかりと結び合ふべきである。然るに日本人にして而も仏教徒と雖も尚タイ国の仏教事情を知るものが尠く亦

之に関する刊行物の寥々たるは遺憾としなければならぬ。貴君が嘗て数種の雑誌に分載せるタイ国仏教に関する記事を一纏めとなし『泰国仏教事情』と題し上梓公けにせられては如何、編輯、校訂、装幀等一切、自分の方にて引受くる」との厚意ある勧めに、予も資料中尚ほ書き足らぬ所もあり、且つ断片的で纏りのつかぬ所もありとは思へども、今更、補遺、書直す暇もなければ其の儘佐々木氏に一任して置いた。扨、印刷成つて通覧するに、予の拙文も垂水紅春氏の周到なる編輯、校訂により行文漸く整ひ、茲に江湖に見ゆることゝなつた。読者は是に依りタイ国仏教事情の片鱗にても知り得らるれば著者望外の仕合せである [佐藤 1942b : 自序 4-5]。

文中にある佐々木喆山とは、曹洞宗僧侶で、前述のように仏教圏協会幹部を務めた人物であり、陸軍関係商社である昭和通商との関係者と人脈を持った。垂水紅春については、かつては演劇人で、戦時中は巴利文化学院において「大東亜仏教圏地図」の編纂準備に関わっていたという。

本書のように、タイの仏教事情を概観したものには、在暹日本人会による書籍がある [在暹日本人会 1922]。佐藤は、同書を参考にしつつ、原稿の執筆を行ったのである⁵。

7 求法と時局

以上で、佐藤致孝の経歴を軸にして、タイとの関わりを中心とした諸活動を考察してきた。時代状況のなかで佐藤を位置付けると、次のことが指摘できる。

佐藤は、タイと関わった日本人仏教者に特徴的であった、明治・大正期の宗教的な動機による関与、昭和戦前期の国策協力を動機とする関与という、二つの側面に関わった人物である。つまり佐藤の場合、前者については釈尊の古跡を求めてタイからの接近を試みて、仏舍利を探し出そうとした。後者については、「大東亜共栄圏」構想のなかのタイが含まれたため、専門であるタイ語を通じて、現地にて「興亜」のために活動する人材を教育したほか、軍の命令による謀略放送の原稿作成や情報収集など、国策に協力する活動を行ったのである。

当時のタイは、東南アジアで唯一の独立国であり、周辺地域は、イギリスとフランスにより植民地化されていた。昭和に入り、満洲事変、国際連盟の脱退、日中戦争を経て対外関係が悪化するなか、次第に日本は、タイを重視する。「日本国暹羅

「日暹通商航海条約」(大正13年条約第17号)が調印され、経済活動が活発になった時期である。1936(昭和11)年11月5日にタイ側から失効通告があったが、改めて、「日本国暹羅国間友好通商航海条約」(昭和13年条約第2号)が調印されて、経済の結びつきを強めた。そして対米英への宣戦布告後には、「日本国「タイ」国間同盟条約」(昭和16年条約第20号)が調印され、日タイは同盟関係を結ぶのである。

こうした時代背景の中で、時局の要望から佐藤の専門的知識が求められたのである。ゆえに、日タイをめぐる様々な場面で、語学力を生かした活動を行っていた。ただ、タイをめぐる時代状況の急激な変化のなかで、佐藤が自分自身の考えを述べた記述は少なく、「仏教」、「戦争」、「タイ」の三者の相互関係をどのように捉えたのかは、検証ができなかったので今後の課題としたい。とはいえ、近代における日本とタイとの関係史を見る際に、仏教者である佐藤致孝の存在は、示唆を与えるものと言えよう。

付記

本稿の執筆に際しては、佐藤致孝が住職を務めた浄土真宗本願寺派常教寺の佐藤正見住職、佐藤の出身校の後身である国立大学法人東京外国語大学の事務局研究協力課の井部真人元課長、同大学文書館より資料の提供をいただいた。

また著者が、タイで活動した日本人に関心を抱いた最初の契機は、大正大学在学中の平成15年度大正大学学術研究助成「国際結婚における宗教的・文化的アイデンティティをめぐる諸問題に関する調査研究」(研究代表者、星野英紀先生)の際に、弓山達也先生の調査補助でタイに同行させていただいたことによるところが大きい。

各位には、厚く御礼を申し上げたい。

註

1 佐藤致孝が、東京外国語学校に学生として所属していた当時、第4代学長(1908-1918年在任)に、日本史学者(日欧交渉史)の村上直次郎(1868-1966)が在職した。それ以前の第3代学長(1900-1908)は、仏教学者の高楠順次郎(1866-1945)である。高楠は、東京帝国大学文科大学教授との兼務であった。高楠は、浄土真宗本願寺派が設立した普通教校(現在の龍谷大学の前身)の出身で、本願寺派関係者と人脈があるが、佐藤における高楠からの学問的影響は未確認である。

- 2 東京外国語学校及び東京外国語大学にて、1919（大正8）年から1953（昭和28）年まで、インドネシア語（戦前は馬來語）とオランダ語を教えた、朝倉純孝（1893-1978）は、石川県江沼郡山中村（現、加賀市）にある真宗大谷派寿経寺の出身である。
- 3 財団法人南洋経済研究所が作成した資料集について、筆者が調べたところ、通巻番号が振られた資料は、安田源四郎『敵米国及米国人を論じて必勝案を語る』（南洋資料第535号、南洋経済研究所、1944年）までの発行を確認した。「南洋資料」は、第600番台が欠番で、第700番台は写真集が割り振られていたが数点程度の発行であった。研究所では、通巻番号が付与されていない作成資料もあり、研究所が作成した資料の総点数は未詳である。
- 4 三吉朋十は、戦前は東南アジア方面において、経済調査活動と商業実務に携わっていた。戦後は石仏研究に移行して、大正大学内に事務局があった仏教民俗学会（初代会長星野俊英）の中心会員の一人として活動を担った。
- 5 『暹羅事情』[在暹日本人会1922]のうち、宗教文化に関する章の構成は次のとおりである。
- 第一四章 宗教 第一節 沿革、第二節 現状（一 布教／二 仏教的国民祭日／三 寺院及僧侶の数／四 管理／五 僧侶の教育）。執筆者は無記。
- 第二章 風俗習慣 第一節 冠婚葬祭（剃髮式／婚礼／葬式／得度式／毘音羯摩天祭）、第二節 年中行事（暦年／新年／誓忠式／尊俱蘭〔ソングラン〕／釈尊の聖日／歓喜天供養祭／安居祭／燈籠流し／迦絺那祭／陸上古式行列／湄南河上の船行列／先帝並に先皇の功德会／白傘蓋の式典／天長節／義勇兵猛虎隊の閲兵式／摩訶仏謝／田作祭／収穫祭）。執筆者は、タイに帰化した三木栄（1884-1966）。
- 『泰国の仏教事情』[佐藤1942b]において、第二章にある「摩訶仏謝」、「尊俱蘭」、「歓喜天供養祭」などの項目は、内容の類似が認められるので、佐藤は執筆に際して参考にしていた。

参考文献

- 今村忠助 1938 「南洋懇話会の設立に就て」佐藤致孝編『南洋懇話会速記録』南洋経済研究所内南洋懇話会
- 上坂倉次 1936 「日本仏家海外渡航年表——明治時代」『海外仏教事情』第3巻第8号、国際仏教協会
- 大澤広嗣 2015 『戦時下の日本仏教と南方地域』法蔵館
- 2017 「昭和前期の仏教界とタイ——藤波大圓と山本快龍の視察」高野山真言宗タイ国開教留学僧の会編『泰国日本人納骨堂建立八十周年記念誌』高野山真言宗タイ国開教留学僧の会
- 大谷光瑞 1942 『マダガスカル島誌』南洋資料第102号、南洋経済研究所

- 1944a 『南アジア連絡鉄道計画』南洋資料第 285 号、南洋経済研究所
- 1944b 『ビルマ水利計画——大谷光瑞師案』南洋資料第 286 号、南洋経済研究所
- 糟谷宗一 1938 「御挨拶」佐藤致孝編『南洋懇話会速記録』南洋経済研究所内南洋懇話会
- 在暹日本人会編 1922 『暹羅事情』東亜印刷出版部
- 佐藤致孝 1932～1933 「中之浜万次郎異国物語」『少年団研究』第 9 卷第 11 号、第 10 卷第 3 号、大日本少年団連盟
- 1937a 『友邦暹羅事情を語る』南経研資料第 1 号、南洋経済研究所
- 1937b 『暹羅の産業に就て』南経研資料第 2 号、南洋経済研究所
- 編 1938a 『南洋懇話会速記録』南洋経済研究所内南洋懇話会
- 1938b 『暹羅産スティック・ラックの台湾移殖に就て』南洋経済研究所
- 1938c 「暹羅王国憲法」『海外之日本』第 12 卷第 12 号、海外之日本社
- 1939a 「暹羅内地を巡る」『財団法人暹羅協会々報』第 14 号、暹羅協会
- 1939b 「暹羅に於けるスティック・ラック」『南洋経済研究所研究資料』第 2 年第 5 号、南洋経済研究所
- 1941a 「東京外語泰語復活経緯」『海外之日本』第 15 卷第 3 号、海外之日本社
- 1941b 「タイ国の仏教」『南方仏教青年会会報』第 1 号、巴利文化学院内南方仏教青年会
- 1942a 「タイ族の言語」『日本語』第 2 卷第 2 号、日本語教育振興会
- 1942b 『泰国の仏教事情』会通社
- 1942c 『泰国の産業に就て』南洋資料第 96 号、南洋経済研究所出版部
- 1943-1944 「共栄圏語学講座——タイ語研究講義」『英語研究』第 36 卷第 7、9、11 号、研究社出版
- 柴田幹夫 2014 『大谷光瑞の研究——アジア広域における諸活動』勉誠出版
- 大東亜省監修 1944 『南方関係会社団体要覧』南洋団体連合会
- 田中忠治編 2002 『東京外国語大学インドシナ語学科百年史』東京外国語大学東南アジア課程
宇根研究室内メコン会
- 東京外国語学校編 1918 『東京外国語学校一覧——従大正七年至大正八年』東京外国語学校
- 東京外国語大学史編纂委員会編 1999 『東京外国語大学史——独立百周年（建学百二十六年）
記念』東京外国語大学
- 東京朝日新聞 1937 「東京外語に暹羅語科」『東京朝日新聞』第 18269 号、2 月 21 日
- 富樫長英編 1941 『東亜調査関係団体要覧——昭和十六年』東亜研究所
- ナワポーン・ハンパイブーン 2013 『タイと日本の仏教交流 タイ・日関係史の一側面——国
交開始から第二次世界大戦終戦に至るまで（1887 年～1945 年）』早稲田大学大学院
アジア太平洋研究科博士論文
- 野中正孝編 2008 『東京外国語学校史——外国語を学んだ人たち』不二出版
- 林行夫 2016 「明治期日本人留学僧にみる日＝タイ仏教「交流」の諸局面」大澤広嗣編『仏教
をめぐる日本と東南アジア地域』アジア遊学第 196 号、勉誠出版
- 扶南堂三友〔佐藤致孝の筆名〕1941a 「タイ国仏教行事」『海外仏教事情』第 7 卷第 2 号、国
際仏教協会
- 1941b 「仏印アンコール大遺跡を訪ふ」『海外仏教事情』第 7 卷第 3 号、国際仏教協
会
- 山名義鶴 1942 「序文」佐藤致孝『泰国の仏教事情』会通社
- 読売新聞新潟・松本支局編 1969 「時代にほろろされた一学究」『信越百年の秘話』野島出版
- 浄土真宗本願寺派常教寺の佐藤正見住職よりインタビュー（2013 年 10 月 21 日、2016 年 2 月
19 日、同年 9 月 29 日実施）